

2人の聖ヨハネをめぐる神話学的考察

渡 邊 浩 司

キリスト教の聖人の祝日が記載されている中世の暦は、キリスト教世界の記憶と異教世界の記憶がぶつかり合う場であり、ヨーロッパの文化を理解するための重要な鍵となっている。本稿は、暦上でそれぞれ6月24日と12月27日に祝日を持つ、洗礼者ヨハネと福音書家ヨハネという2人の聖ヨハネをめぐる神話学的考察である。2人の聖ヨハネの祝日がほぼ「夏至」と「冬至」に対応するのは偶然ではない。西洋の占星術伝承によれば、「夏至」と「冬至」はそれぞれ「蟹座」と「山羊座」に対応するため、2人の聖ヨハネは「至点の扉」の門番の役割を果たしているのである。門番の雛形は、2つの顔を持つ古代ローマの神ヤヌスであり、中世のキリスト教世界はヤヌスを2人の聖ヨハネとして再解釈した。一方で「蟹座」と「山羊座」の守護星がそれぞれ「月」と「土星」であることは、2人の聖ヨハネが「メランコリー」の影響下にあったことも示唆している。

はじめに

中世のキリスト教の暦は、インド=ヨーロッパ語族の記憶とユダヤ=キリスト教の記憶という元来は全く別物であった2つの記憶がぶつかり合い、徐々に溶け合っていく戦略的な場である。たとえば、すべての聖人を記念する11月1日の「万聖節」と、すべての死者の魂のために祈りを捧げる11月2日の「万霊節」の背後に見え隠れするのは、ケルトの4つの大祭の1つ「サウイン」である¹⁾。古代ケルト人にとっての年始にあたる11月1日周辺では、異界の扉が一時的に開かれ、人間界と異界との束の間の交流が行われると考えられており、この時期にキリスト教は意図的に「万聖節」と「万霊節」を配置したのである。今でもこうした思想は、「ハロウィン」に受け継がれている²⁾。

中世の暦ではさらに、キリスト教の重要な祝祭日が、春分と秋分、夏至と冬至のサイクルと関連づけられている点も忘れてはならない。処女マリアの前に現われ、聖霊によってマリヤがイエスを身籠ることを告げる大天使ガブリエルの祝日3月24日は、キリスト降誕の9カ

1) ケルトの大祭については、Le Roux et Guyonvarc'h (1995) を参照。

2) ヴァルテール (2014)。

月前に位置すると同時に「春分」とも対応しているが、これは偶然ではない。一方で、天上の軍勢の長として悪魔や龍と戦う大天使ミカエルの祝日9月29日が「秋分」に対応するのは、死者の魂を異界へと誘う靈魂導師としての働きをミカエルが兼ね備えているからである³⁾。キリスト教は、昼と夜の長さが均等になる「春分」と「秋分」にそれぞれ、「生」と「死」に関連した大天使を配置したのである。

これに対し、1年の中で日の長さが最大になる「夏至」と、日の長さが最小になる「冬至」を、キリスト教の暦はどのように解釈したのだろうか。その鍵となるのは、「クリスマスと聖ヨハネ祭は1年を分け合っている」(Noël et Saint-Jean partagent l'an.)というフランスの諺である。「クリスマス」はイエス・キリストの降誕を祝う12月25日であり、「聖ヨハネ祭」はイエスに洗礼を施した聖ヨハネの祝日6月24日である。通常、聖人の祝日が地上で亡くなった日とされるのは、命日が天国での誕生日とみなされていたからである。しかしながら、イエスと洗礼者ヨハネはこの法則に従わず、例外的に誕生日が祝日となっている。洗礼者ヨハネはイエスのちょうど半年前に生まれているため、2人の祝日が1年を2分している、というのが先の諺の意味するところである。もう1つ、よく似たフランスの諺に、「ヨハネとヨハネが1年を分け合っている」(Jean et Jean se partagent l'an.)という諺もある。本稿はこの諺に出てくる、2人の聖ヨハネをめぐる神話学的な考察である。

1. 2人のヨハネ

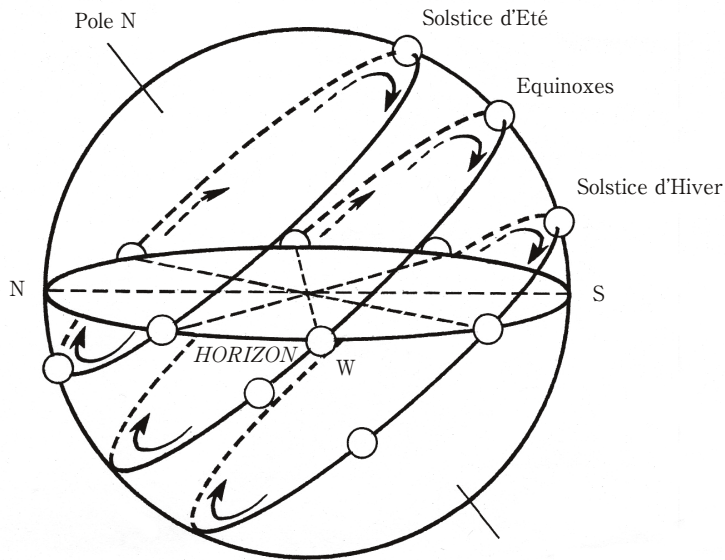
先述の諺に出てくる2人のヨハネのうちの1人は、イエスに洗礼を施したヨハネであり、もう1人はイエスの12使徒に含まれる福音史家のヨハネである。祝日はそれぞれ6月24日と12月27日であるが、この2つが「夏至」と「冬至」に近いのは偶然ではない。『ヨハネによる福音書』3, 30には、洗礼者ヨハネの証言として、「あの方(=イエス)は栄え、わたしは衰えねばならない⁴⁾」という言葉が記されているが、これはイエスと洗礼者ヨハネの誕生日がそれぞれ「冬至」と「夏至」に対応していることを表している。太陽暦では6月22日頃にあたる「夏至」は、たとえて言えば、ジェットコースターの頂上にある太陽が緩やかに下降運動を始める時期であるのに対し、「冬至」はジェットコースターの最も低い位置にある太陽が昇り始める時期、つまり太陽の上昇運動の開始時期にあたる(図1-1)。

聖書には日付が全く記されていないクリスマスが12月25日と定められた背景にも、太陽信仰が存在した。通説によれば、4世紀前半にローマのコンスタンティヌス大帝(在位は306年から337年)が、ローマで人気を博していたインド・イラン系の太陽神ミトラの誕生日に

3) ヴァルテール(2007)第9章「ガルガン山上の聖ミシェル」を参照。

4) 以下、聖書からの引用は、日本聖書協会(2001)による。

図 1-1 太陽の運行



(上から夏至, 春分と秋分, 冬至)

(出所) Gagnebet (1986), p. 140.

合わせるように、イエスの誕生日を12月25日に定めたと考えられている⁵⁾。北半球で日の長さが1年で一番短い「冬至」は、いわば太陽（神）の誕生日なのである。中世のキリスト教はこの「冬至」の時期に、福音史家ヨハネの祝日を配置した。こうして2人のヨハネは、天文学的に重要な2つの至点に対応し、1年の軸をなすことになったのである。

夏と冬にある「至点」を指すフランス語（および英語）は solstice である。そのもとになったラテン語「ソールスティティウム」(solstitium) は「太陽」(sol) と「停止する」を意味する動詞 (sisto) の変化形からなる合成語である。そのため「至点」は、語源的には「太陽が停止する時期」を指す。この「至点」の語源通り、太陽が仮に宇宙で運行を停止することになれば、いかなる事態が予想されるだろうか？ 北半球では昼の長さが1年で最も長くなる「夏至」には、動きを止めた太陽が破壊的な火を放出し、生命をことごとく焼き尽くすのではないかという恐怖を、古代ヨーロッパの人々が抱いたとしても驚くにはあたらない⁶⁾。「夏至」の時期に行われた前キリスト教的な異教の火祭りの中には、太陽のつづがない運行を保証し、太陽の停止が招きうる宇宙規模の災厄を回避したいという痛切な思いを反映したものもあったはずである。

5) クルマン (1996)。

6) 太陽の破壊的な火については、ヴァルテール (2011) を参照。

元来、「夏至」と異教の太陽信仰に由来する火祭りは、キリスト教諸国では6月24日を祝日とする洗礼者ヨハネを介して再解釈され、「聖ヨハネの日の火祭り」として存続してきた⁷⁾。火祭りの形態や意味は、時代や地域によって大きく異なっており、用意した薪の山に点火するという形態が有名であるが、中には丘の上から火の車輪を転がすという形態も認められる。フランス・ロレーヌ地方のシエルク＝レ＝バンでは今でも、火の車輪を転がす風習が存続し、モゼル川に車輪が沈むとブドウの収穫が豊作になると村民は信じている。しかしながら「聖ヨハネの日の火祭り」に登場する火の車輪は元来、夏至の太陽を表し、車輪を転がす儀礼には太陽の滞りない運行を後押しする意味があったのではないだろうか。あるいは破壊的な太陽の力を、太陽を象った車輪を使って弱めるという類感呪術的な発想がこの儀礼を支配していた可能性もあるだろう⁸⁾。

2. 至点の扉

西洋の占星術伝承によると、「夏至」と「冬至」はそれぞれ「蟹座」と「山羊座」に対応する(図2-1)。またそれぞれの星座には、太陽が出入りする扉があったとされる。18世紀の天文学書に描かれた図版では、蟹が後退りしながら扉の中へ入る動きで「夏至」が、山羊が扉から飛び出す動きで「冬至」が描かれている(図2-2, 図2-3)。これに対し、フランス南部ガール県で9世紀に作られた『リュネルの詩篇集』の挿絵では、蟹の右横にある扉と、山羊の右横にある扉に太陽が近づくことがそれぞれ「夏至」と「冬至」を表しており、いずれの扉にも右側に、開閉を担当する黒人の門番が描かれている(図2-4, 図2-5)。挿絵画家は黒人の奴隷をモデルに2人の門番を描いた可能性が高いが、中世のキリスト教はこの門番の役割を2人のヨハネに委ねたのである。

この2つの至点の扉は、ルネ・ゲノンによると、ヒンドゥー教の伝承に登場する「先祖たちの扉」(Pitri Yana)と「神々の扉」(Deva Yana)と対応するばかりか、古代ギリシアの伝承にも類例が見つかるという⁹⁾。たとえばホメロスの『オデュッセイア』第13歌・第102行～112行に言及のある「ニンフの洞窟」には2つの入口があり、このうち北に向かって開く入口は「人間の通路」、南に向かって開く入口は「神々の通路」だと記されている¹⁰⁾。この

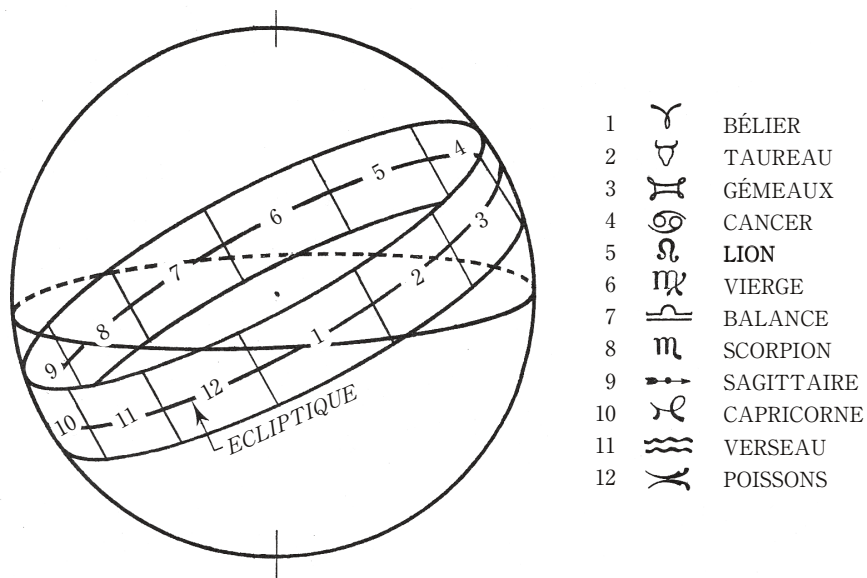
7) 「聖ヨハネの日の火祭り」の現況についてはたとえば、アルザス地方南部オー＝ラン県のスルツバック＝レ＝バンで蔵持が行った現地調査(蔵持(2013))を参照。

8) ロシアのカフカス地方に住むオセット人が口承で伝えてきた「ナルト叙事詩」には、「火の車輪」儀礼の本来の意味を示唆する、太陽英雄ソスランの死に関する挿話が見つかる。ヴァルテール(2007), 205-206ページを参照。

9) Guénon (1962), pp. 217-227.

10) ホメロス(1994), 15ページ。

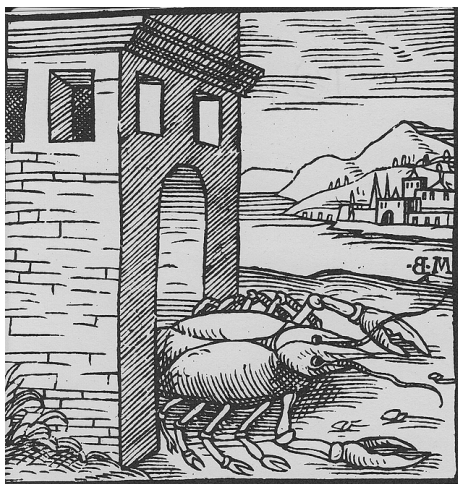
図2-1 2つの至点の扉



(黄道上で4番が「蟹座」, 10番が「山羊座」)

(出所) Gaignebet (1986), p. 141.

図2-2 18世紀の天文学書が描く「蟹座」



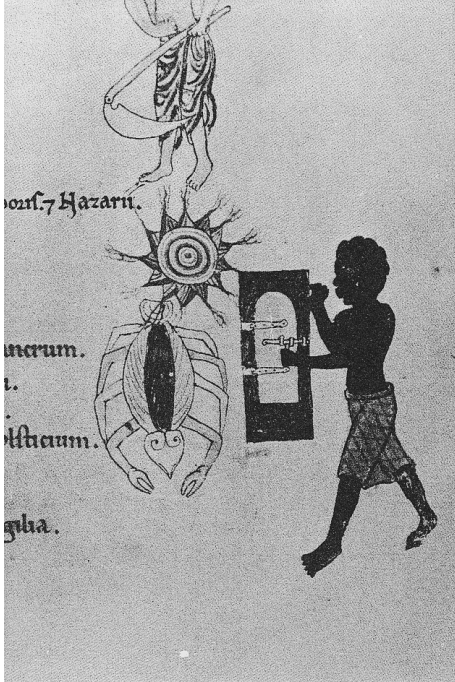
(出所) Gaignebet (1986), p. 140.

図2-3 18世紀の天文学書が描く「山羊座」



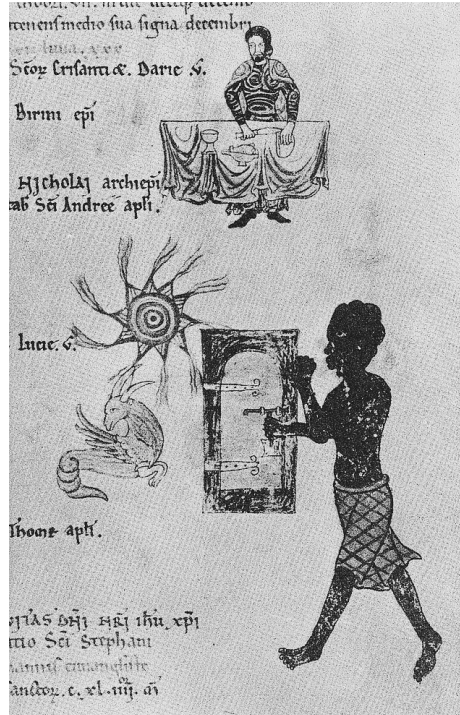
(出所) Gaignebet (1986), p. 141.

図2-4 『リュネルの詩篇集』が描く「蟹座」の扉



(出所) Gaignebet (1986), p. 139.

図2-5 『リュネルの詩篇集』が描く「山羊座」の扉



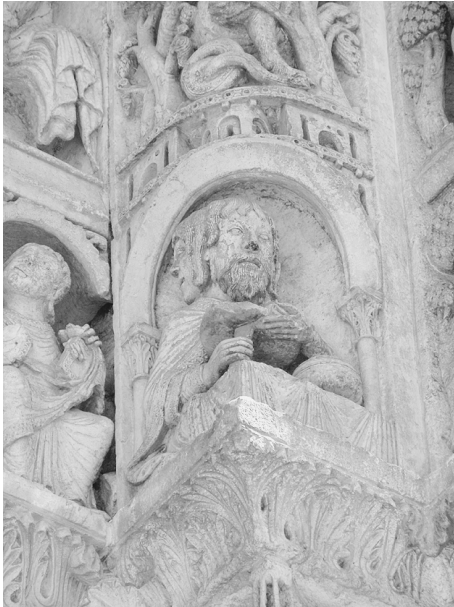
(出所) Gaignebet (1986), p. 139

2つの入口は、「夏至」と「冬至」に太陽が通過する扉に他ならない。同じ古代ギリシアには、それぞれ真実の夢と偽りの夢を地上に送るという「角の扉」と「象牙の扉」の伝承があり、19世紀のフランスの詩人ジェラルド・ド・ネルヴァルが小説『オーレリア』(Aurélia)の冒頭¹¹⁾で触れているが、この2つの門も太陽の運行や靈魂および神々の通路をめぐる伝承と接続しているのかもしれない。

門番と至点との密接なつながりを古代ローマに求めると、ヤヌス (Janus) という名の神が直ちに想起される。なぜなら古代ローマでは「職人組合」(Collegia Faborum)が、「夏至」と「冬至」にヤヌスの祭りを挙行していたからである。ヤヌスの名は「扉」「門」「敷居」を指す「ヤヌア」(janua)に由来するため、もともとヤヌスは戸口の守り神であった

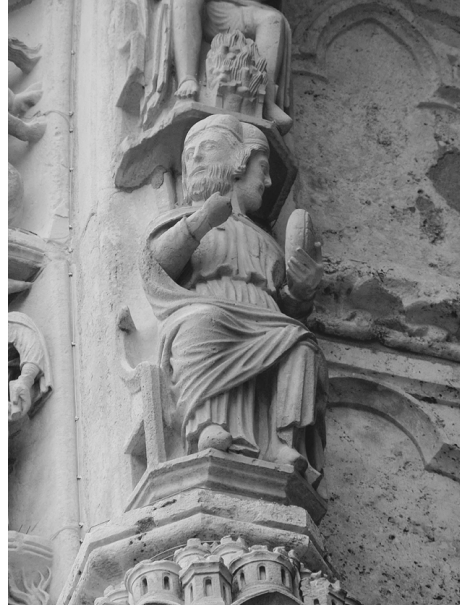
11) « Le rêve est une seconde vie. Je n'ai pu percer sans frémir ces portes d'ivoire ou de corne qui nous séparent du monde invisible. » 篠田知和基訳によると、「夢はもうひとつの生である。見えない世界とわれわれとをへだてている、あの、象牙ないしは角の扉を私は慄えずには押し開けることはできなかった。」(ネルヴァル (1991), 11ページ)。

図2-6 シャルトル大聖堂西門のヤヌス像



(出所) 筆者撮影。

図2-7 シャルトル大聖堂北袖廊右側開口部のヤヌス像



(出所) 筆者撮影。

が、その守護領域が「時間」にも適用されると、すべての行動の開始を司る神にもなった。1年の扉口ともいうべき「1月」がラテン語で「ヤヌーアーリウス」(januarius)つまり「ヤヌスの月」と呼ばれる所以である(英語では「ジャンユアリー-January」、フランス語では「ジャンヴィエ-Janvier」となる)。ヨーロッパでは12世紀から13世紀にかけて、聖堂外壁の多くが、12カ月の擬人像と黄道12宮を配した月暦図によって飾られるようになった。このうち「1月」がヤヌスによって表されているものもある¹²⁾。たとえば、パリの南西約70キロメートルにあるシャルトルの大聖堂では、12世紀の王の扉口(西門)(図2-6)のみならず、13世紀の北袖廊右側開口部(図2-7)にも、「1月」を表すヤヌスの彫刻が置かれている。

ヤヌスの外見上の最大の特徴は、前後に2つの顔を持った姿である¹³⁾。5世紀初頭に活躍したローマの哲学者マクロビウスが『サトゥルナリア』(Saturnalia)第1巻第9章で指摘する通り、古代にはヤヌスを太陽と同一視し、2つの頭を「天の2つの扉」を支配する力と関連づけていた人々もいたという¹⁴⁾。中世のキリスト教世界になると、2つの顔が描き分け

12) 月暦図については、児嶋(2006)を参照。

13) インド=ヨーロッパ語族の2面的始原神としてのヤヌスの側面については、吉田(1975)を参照。

られて「老人」と「青年」の顔になり、それぞれが「過去」と「未来」と関連づけられる。ピエール・グリマルが指摘するように¹⁵⁾、古代ローマ期のヤヌスは、時の「開始」のみを司っていたが、中世になるとキリスト教解釈により、「過去」から「未来」までを包括する「時間」を司る神へと変貌する。その証拠に、後期ラテン教父の中で最も重要な神学者の1人、セビリヤのイシドルス（560年頃～636年）は『語源』（*Etymologiae*）の中で、「ヤヌスが2つの顔で描かれるのは、1年の始まりと終わりを表すからである」¹⁶⁾と述べている。1099年に建設が開始された、北イタリアのモデナ大聖堂の正面中央扉口のアーキヴォールトの要石に、ヤヌスの2面像が描かれているのは、ヤヌスが「扉」の神であると同時に「時間」を支配する神だからである¹⁷⁾。

ヤヌスのキリスト教的解釈はこれにとどまらず、次の段階ではヨハネと関連づけられる。ヤヌスとヨハネ（フランス語ではそれぞれ「ジャンヌス Janus」と「ジャン Jean」）に語源上のつながりは認められないが、音声上の類似から同一視され、古代ローマ期の「夏至」と「冬至」のヤヌス祭に対応させるかのごとくに、2人のヨハネが2つの至点に配置されたのである。古代ローマの「職人組合」が中世の「同職組合」に受け継がれ、大聖堂や教会の建設に携わった職人たちが2人の聖ヨハネを守護聖人としたことも、ヤヌスが再解釈されて2人のヨハネになる過程を裏付けてくれる¹⁸⁾。

3. 悲しみと喜び

ヨハネは英語ではジョン John, フランス語ではジャン Jean, ドイツ語ではヨハネス Johannes と言い、キリスト教世界で最も好まれた名前である。ポール・ゲランによると、ヨハネと呼ばれる聖人は350人を下らないと言われるほど多いという¹⁹⁾。聖書にもヨハネの名を持つ人物は複数登場する²⁰⁾。

ヨハネのヘブライ語名ヤハナン Jahanan に含まれる「ハナン」(hanan) には、「慈悲」と「称賛」という2つの意味がある。そのため、ヤハナンは「神の慈悲」と「神の賛辞」を指

14) Macrobe (1997), p. 44.

15) Grimal (1944).

16) «Bifrons idem Janus pingitur ut introitus anni et exitus demonstretur», Migne (1841-1855), vol. 82, col. 219.

17) モデナ大聖堂のヤヌス像の解釈については、尾形希和子 (2013), 194-196ページを参照。

18) Guénon (1962), pp. 228-231. フリーメーソンが2人の聖ヨハネを崇拜対象としたのは、光明の告知者とみなされた2人とフリーメーソン団との精神的なつながりが明白だったためである (ノードン (1996), 34ページ)。

19) 堀田・奥平・植田 (1983), 85ページ。

20) ブラウンリッグ (1995), 355-379ページ。

す。この2つはまさしく、洗礼者ヨハネと福音史家ヨハネに対応している。2人のヨハネが神に対して見せる異なる態度は、それぞれの祝日が「夏至」と「冬至」に対応していることから、天文学的な解釈が可能である。「慈悲」は神から洗礼者ヨハネに向かうため、太陽の「下降運動」の開始時期としての「夏至」に対応するのに対し、「称赞」は福音史家ヨハネから神に向けられるため、太陽の「上昇運動」の開始時期としての「冬至」に対応するからである。

こうした発想に近いのが、「泣くジャンと笑うジャン」(Jean qui pleure et Jean qui rit) という諺的表現である。フランスでは、つい先程まで号泣していたと思っていたら、今では笑っているという、子供の感情の移ろいやすさを表現するときによく引き合いに出される表現である。ジャン(=ヨハネ)の「悲しみ」と「喜び」を端的に表したこの一節は一方で、ヤヌスの2つの顔を想起させるばかりか、2人のヨハネが神に対して見せた異なる態度を表しているのではないだろうか。「泣くジャン」は神に「慈悲」を乞う洗礼者ヨハネ、「笑うジャン」は神に「賛辞」を送る福音史家ヨハネを描いているように思われるからである²¹⁾。

4. 福音史家ヨハネと土星

祝日がそれぞれ「夏至」と「冬至」周辺に配置された洗礼者ヨハネと福音史家ヨハネは前述の通り、西洋の占星術伝承によればそれぞれ「蟹座」と「山羊座」との接点を持っていた。一方でこの2つの星座の守護星(ルーラー)が、それぞれ「月」と「土星」であることは、フィリップ・ヴァルテールが指摘するように、2人の聖ヨハネが「メランコリー」の影響下にあったことをも示唆している²²⁾。

現代医学では気分障害の一種とみなされる「メランコリー」は、古代医学の4体液説によれば、人間の体内にある血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁のうち、黒胆汁が過剰な人に特有の気質とされた。中世期やルネサンス期になり、こうした思想が占星術や天文学と結びつき、「メランコリー」が「土星」と関連づけられるようになった経緯は、クリバンスキーらの研究²³⁾に詳しい。アルブレヒト・デューラーの『メランコリア I』(1514年)が寓意的に描くように、「メランコリー」は、詩人、芸術家、哲学者など多くの偉人にとって、比類なき創造力や靈感の源泉と考えられたのである。土星は太陽から数えて6番目に位置する惑星であるため、神々の住む最高点に近いとされ、いわゆる「土星の子」は千里眼とみなされた。

こうした観点に立つと、祝日が「冬至」近くにある福音史家ヨハネは、「土星」の影響を

21) Guénon (1962), p. 230, note 2.

22) Walter (2002), pp. 140-144.

23) クリバンスキー・パノフスキー・ザクスル (1991)。